定時制高校生の英語における
数字と語と文の直後筆記再生の分析と教育的示唆

ウィリアムズ厚子

論　文　要　旨

本研究は、定時制高校に通う生徒の英語に関する認知機能を分析し、心理言語学的示唆を求め、教育への応用と発達的な研究の可能性を提唱することを目的としたものである。

本調査に参加した高校生の定時制高校への入学や転編入学の背景は、就労の必要や心理的な要因、学力の到達度、あるいは純粋に学習意欲など、多岐にわたる。そのため、入学時点での学習経験や学力においても個人差が大きいが、大部分の生徒は基礎学力が不足している。中でも、記憶学習を基礎とする英語の到達度は低く、学習意欲も高くない。その原因が、学習習慣によるものなのか、あるいは認知能力によるものなのかを明らかにすることは、授業へのフィードバックのみならず、初級英語学習者に対する英語教育や、ひいては第 2 言語教育一般の一助になると考える。本研究では、定時制高校生の英語聴解に着目し、学習経験を異にする国立大学生の英語再生と比較することにより、記憶という枠組みで調査、考察をした。

第 1 章では、定時制高校の実態と調査参加生徒について述べた。第 2 章では、聴解のメカニズムにおける中心的概念である、記憶とワーキングメモリに関する先行研究を概観し、さらに本研究に関連する、ワーキングメモリと学習教科の習得との関係における先行研究について触れた。第 3 章では、本調査で実施する 3 つの記憶再生課題である、英数字再生、英単語再生、英文再生における調査方法と、その調査の評価方法について述べた。第 4 章では、英数字再生の調査結果を分析し、考察をした。その結果、高校生の再生率は大学生よりも低く、高校生の再生に日本語による頻度効果の影響を受けていたが、その一方、大学生はその影響を受けていないことが明らかになった。また、数字は、小さい方が大きい方よりも長期記憶にアクセスしやすいということも明らかになった。さらに、置換エラーについて分析すると、両群ともに数字頻度効果の影響を受けていることも明らかになった。脱落エラーの分析では、両群ともに数字頻度効果の弱い傾向がうかがえた。したがって、両群ともに、英数字の再生に長期記憶がかかわっていることが明らかになった。第 5 章では、英単語再生の調査結果を分析し、考察をした。その結果、英数字再生と同様に高校生の再生率は大学生よりも低く、その差は、英単語の親密度と語知識によるということがわかった。また、高校生と大学生の再生が質的に類似しており、連続的であった。したがって、系列位置効果に加え、語の特性に関する長期記憶の影響を受けていることが明らかになった。6 章では、英文再生の結果を分析し、考察した。その結果、高校生の再生率は大学生よりも低く、文の再生には、音韻的長期記憶や統語意味知識の効果が大きく、学習経験が強く影響をしていることが明らかになった。また、高校生の再生においても共通した長期記憶の影響があることも明らかになった。大学生の再生には、日本語の影響を受けたと考えられる共通したものもあった。第 7 章では、3 課題の共通する語数である 5 語、6 語、7 語の再生結果を比較し、異なる言語水準における認知機能の個人差について考察をした。その結果、再生語数により群間、群内で記憶再生の処理が異なっていることが明らかになった。また、再生語数が多くな

ると、群間での処理の違いが小さくなること、さらに、再生課題の語数にかかわらず、2 群における再生語数の差はほぼ一定であることも明らかになった。ここでは、個人差とワーキングメモリの関係についてのさらなる考察のために、背景において特徴的な高校生の再生を個別に研究した。その結果、バイリンガル生徒の再生に日本語以外の言語の影響が見られなかったこと、3 組の姉弟の再生に類似性があること、さらに、学習経験のある生徒は英単語の再生が英文の再生よりも低く、大学生の再生に似ていることが明らかになった。

第 8 章では、本調査の結果をまとめ、そこから得られた教育的示唆から、今後の英語教育への応用について述べた。高校生の数字再生に日本語の影響が強かったことから、普段の授業における英語や数字の過剰学習や、授業外で英語の数字や英語頻度語を多く使用すること、また、英単語の再生に語の親密度が影響をしていたことから、語彙量を増やし、英語に速くアクセスできるような練習を重ねることの必要性、さらに、英文再生でも統語意味知識の影響が強かったことから、語彙量や統語知識を増やすことと、チャンクの記憶学習を増やし、長期記憶に定着させることの重要性について述べた。